

<特集「がんサバイバーと社会共生：言葉の処方箋」>

『がん哲学外来』における『がん教育』

樋 野 興 夫<sup>\*1, 2, 3, 4</sup>

<sup>1</sup>がん哲学外来市民学会

<sup>2</sup>順天堂大学

<sup>3</sup>新渡戸稲造記念センター

<sup>4</sup>恵泉女学園

“Cancer Education” within the “Cancer Philosophy Clinic”

Okio Hino<sup>1, 2, 3, 4</sup>

<sup>1</sup>*Cancer Philosophy Clinic Association for the People*

<sup>2</sup>*Juntendo University*

<sup>3</sup>*Inazo Nitobe Memorial Center*

<sup>4</sup>*Keisen Jogakuen*

抄 録

「がん哲学外来」は、患者と家族が尊厳を保ちながら生活し、病気との共生を目指す場として2008年に開設された。この外来は、医療の枠を超え、患者に寄り添う「言葉の処方箋」を提供し、心のケアや社会とのつながりを支えることを目的としている。その理念や活動の歴史、教育的アプローチの実際について紹介するとともに、「がん哲学外来市民学会」や「がんカフェ」などの活動を通じた社会的影響についても考察する。さらに、がん教育が患者、家族、医療従事者、そして地域社会にもたらす効果とその重要性についても論じることで、患者中心の医療における教育的支援の新たな可能性を提示するとともに、医療現場における心のケアの在り方を再評価する契機を提供したいと考えている。

キーワード：がん哲学外来、言葉の処方箋、がん教育。

Abstract

The “Cancer Philosophy Clinic” was established in 2008 as a place where patients and their families can live with dignity and live in harmony with their illness. This outpatient clinic aims to provide a “prescription for words” that goes beyond the boundaries of medical care and is close to patients, supporting their mental care and connection with society. This lecture will introduce its philosophy, history of activities, and actual educational approach, as well as discuss its social impact through activities such as the “Cancer Philosophy Clinic Association for the People” and the “Cancer Café. Furthermore, by discussing the effects and importance of cancer education for patients, families, health-care professionals, and local communities, we hope to present new possibilities for educational

令和6年11月26日受付 令和6年11月26日受理

\*連絡先 樋野興夫 〒113-8421 東京都文京区本郷2-1-1 順天堂大学医学部

ohino@juntendo.ac.jp

doi:10.32206/jkpum.134.02.99

support in patient-centered healthcare and provide an opportunity to reevaluate the state of mental health care in the medical field.

**Key Words:** Cancer philosophy clinic, Prescription for words, Cancer education.

## は じ め に

2024年7月13日『第13回 がん哲学外来コーディネーター 養成講座 in 京都：大人も 子どもも がんカフェを知る～カフェの未来像～』、翌日の7月14日『第12回 がん哲学外来市民学会大会：出会いの中で実を結ぶ～がん教育とともに～』が開催される運びとなった。大会長の京都府立医科大学 分子標的予防医学教授 武藤倫弘先生の『先見性・力量・胆力』、スタッフの皆様の『懸命な心温まるおもてなし・賢明な寛容性』には、ただただ感服した。

武藤倫弘先生から【先日は、第13回がん哲学外来コーディネーター養成講座 in 京都および、第12回がん哲学外来市民学にご登壇していただき、ありがとうございました。この記念的な学会の内容を後世に残すために報告書の作成を考えていたところですが、この度『京都府立医科大学雑誌』特集『がんサバイバーと社会共生：言葉の処方箋』の取りまとめをすることになりました。そこでご提案でございますが、先生のご発表内容を本学の大学雑誌に寄稿していただくことはできますでしょうか？正式には事務局から依頼を出しますが、以下の内容を考えております。テーマ：『がん哲学外来』における『がん教育』の連絡を頂いた。

### がん哲学の理念および がん哲学外来の設立とその目的

想えば、『第1回がん哲学外来コーディネーター養成講座』（2011年12月17日、18日）が佐久で開催され、『佐久宣言』が採択されるに至った。

- 1) 『がん哲学外来市民学会』の設立
  - 2) 『がん哲学外来コーディネーター養成講座』修了証の発行
- 『患者主体の医療』の基盤整備の一助となる

ことが期待され、施策等への活用が可能である。患者・家族は がんとともに生きていく上で、病気を治すことだけでなく、人とのつながりを感じ、尊厳を持って生きることを求めています。『がん哲学外来市民学会』は、医師、医療従事者、一般市民、学生、中高生、あらゆる人々が立場を超えて集う『交流』の場でもある。市民の立場に立つ『医療維新』を目指す。【『がん哲学』とは、『がん細胞から人間社会の病理をみる』】である。

### 『がん哲学』～人は、がんとともに どのように生きていくのか～

- 1) 病気になったとき、人はどのように感じ、何を考えますか？
- 2) 家族は、どのように患者さんを 支えることができますか？
- 3) 周りの人は、どのように患者さんを 支えることができますか？
- 4) 人の支えは、患者さんに、どのような効果をもたらしますか？

### 『がん哲学外来とは』

『がん哲学外来の絶対性大原理』

愛がなければ全ては無意味

『がん哲学外来の真髄』

- (1) 愛に溢れた雰囲気
- (2) 静かな口調
- (3) にもかかわらず

『がん哲学外来の心得』

- (1) 仮面を外し、心の垣根をとる
- (2) 秘密は守る、リラックスした時間を過ごす
- (3) 正直になる、積極的に人々に仕える

『人間は、ロビンソン・クルーソーの様に孤島にひとり住んでいたのでは、良い人が悪い人かは判らない、人間社会の中に住まわせてみて

初めてその性（サガ）が明らかになる。がん細胞もしかり。』&『がん細胞は増殖して仲間が増えると、周囲の正常細胞からのコントロールを脱し、悪性細胞としての行動をとるようになる。君達学生諸君も似たところがある。一人ひとり話をすると、常識もあり善良な青年にみえるのだが、学生自治会として集団行動をとると、変なことを云ったりしたりする。』（吉田富三：1903-1973）

『真理は円形にあらず、楕円形である。一個の中心の周囲に描かるべきものにあらずして、二個の中心の周囲に描かるべきものである。一人は何事によらず 円満と称して円形を要求するが、天然は 人の要求に応ぜずして 楕円形を採るはふしぎである。一患難の坩堝（るつぼ）の内に燃え尽くす火に 鍛えられて初めて実得し得るものである。』（内村鑑三：1861-1930）

私の故郷【当時の住所名：島根県簸川郡大社町鵜峠（うど）】、現在は、島根県出雲市大社町鵜峠は無医村であり、幼年期、熱を出しては今亡き母（96歳で逝去）に背負われて、隣の村（鷺浦）の診療所に行った体験が、脳裏に焼き付いている。そして『人生3歳にして、医者になろうと思った』（添付）。712年に編纂された『古事記』に登場する、医療の原点を教えてくれる大国主命の出雲大社から、8キロほど、峠を越えて美しい日本海に面した小さな村が、私の生まれ育った鵜峠である。隣の鷺浦と合わせて、鵜（う）鷺（さぎ）と呼ばれている。713年の『出雲国風土記』にも登場する歴史ある地である。

その村で、私の生涯に強い印象を与えたひとつの言葉がある。母校の鵜鷺小学校（鵜峠と鷺浦の中間に位置する）の卒業式で、来賓が言った言葉「ボーイズ・ビー・アンビシャス」(boys be ambitious)である。札幌農学校を率いたウィリアム・クラーク(1826-1886)が、その地を去るに臨んで、馬上から学生に向かって叫んだと伝えられている言葉である。もちろん、当時の私は、クラークのことも札幌農学校のことも知らず、クラーク精神が新渡戸稲造(1862-1933)、内村鑑三(1861-1930)という後に、私

の尊敬する2人を生んだことも知らぬまま、ただ、鵜鷺小学校の卒業式で、来賓が言った言葉の響きに胸が染み入り、ぼっと希望が灯るような思いであったものである。これが私の原点であり、そして19歳の時から、尊敬する人物を、静かに、学んできた。その人物とは、南原繁(1889-1974)であり、上記の新渡戸稲造・内村鑑三であり、また、矢内原忠雄(1893-1961)である。

南原繁が東大総長時代の法学部と医学部の学生であった2人の恩師から、南原繁の風貌、人となりを通じてうかがうことが出来た。南原繁は、『高度な専門知識と幅広い教養』を兼ね備えている人物であり、【『視野狭窄にならず、複眼の思考を持ち、教養を深め、時代を読む『具眼の士』】である。これまで学んできた南原繁の言葉は、まさに『言葉の処方箋』である。人間は、自分では『希望のない状況』であると思ったとしても、『人生の方からは期待されている存在』であると実感する深い学びの時が与えられている。その時、その人らしいものが発動してくるであろう。『役割意識&使命感』の自覚へと導く。『練られた品性と綽々たる余裕』は『教育の真髄』である。『ビジョン』は人知・思いを超えて進展することを痛感する。『国民の理想とビジョンをつくり出すのは、根本において教育と学問のほかにはない』（南原繁）。一見『理解不能モード』である複雑な現代社会・混沌の中での『一筋の光』を感じる日々である。クラーク精神が、『内村鑑三&新渡戸稲造』へと導かれ、英文で書かれた『代表的日本人』（内村鑑三）&『武士道』（新渡戸稲造）は、若き日からの座右の書である。そして、南原繁&矢内原忠雄と繋がった。『人生邂逅の非連続性の連続性』であった。私は、現在『南原繁研究会』の第3代目の代表を仰せつかっている。

『生活環境や言葉が違ってても心が通えば友達であり、心が通じ合う人と出会うことが人間の一番の楽しみである。』（新渡戸稲造）を体験する日々でもある。『楕円形の心〜がん哲学エッセンス〜』（2018年 春秋社）、『種を蒔く人になささい』（2019年 いのちのことば社）

にも「内村鑑三・新渡戸稲造・南原繁・矢内原忠雄」について記述した。すべての始まりは『人材』である。『はしるべき行程』と『見据える勇氣』、そして世界の動向を見極めつつ、高らかに理念を語る『小国の大人物』出でよ！

1933年3月3日に三陸で地震の大災害があったと記されている。その時、新渡戸稲造は被災地宮古市等沿岸部を視察したとのことである。その惨状を目の当たりにした新渡戸稲造は『Union is Power』（協調・協力こそが力なり）と当時の青年に語ったと言われている。まさに、今にも生きる言葉である。

広辞苑によれば、国手とは『国を医する名手の意』、名医また医師の敬称とあり、『医師は直接、間接に、国家の命運を担うと思うべし』とのことである。医師の地上的使命と同時に『日本の傷を医す者』（矢内原忠雄：1945年12月23日の講演）が蘇った。政治家にして医師のセンスを兼ね備えるのは至難のことである。しかしその稀有の例が過去の日本にもいた。後藤新平（1857-1929年）である。1882年、岐阜で暴漢に襲われ負傷した板垣退助（1837-1919）を医師として手当し、板垣退助に『医者としておくには惜しい。政治家になれば、かなりのものになるであろうに』と言わしめた後藤新平は実際、関東大震災後の東京復興の壮大なビジョンを描いたリーダーとして【『理想郷を作りたいと願う熱い思い』を持ち『行動する人間』】であったとのことである。後藤新平は、新渡戸稲造をいろいろな局面で抜擢した人物でもある。

2003年に初版『われ21世紀の新渡戸とならん』、2018年に新訂版、2019年4月には英語版『I Want to Be the 21st Century Inazo Nitobe』が発行されることになった。タイミング的には『新渡戸稲造記念センター長』就任記念ともなった。驚きである。人知を超えて、時が進んでいることを痛感する日々である。

### 『理念』：3カ条

#### (1) 世界の動向を見極めつつ歴史を通して今を見ていく

(2) 俯瞰的に病気の理を理解し「理念を持って現実に向かい、現実の中に理念」を問う人材の育成

(3) 複眼の思考を持ち、視野狭窄にならず、教養を深め、時代を読む「具眼の士」の種蒔き

### 『風貌と胆力』：7カ条

(1) 自分の研究に自信があつて、世の流行り廃りに一喜一憂せず、あくせくしない態度

(2) 軽やかに、そしてものを楽しむ。自らの強みを基盤とする

(3) 学には限りないことをよく知っていて、新しいことにも、自分の知らないことにも謙虚で、常に前に向かって努力する

(4) 段階ごとに辛抱強く、丁寧に仕上げていく。最後に立派に完成する

(5) 事に当たっては、考え抜いて日本の持つパワーを充分に発揮して大きな仕事をす

(6) 自分のオリジナルで流行を作れ！

(7) 昔の命題は、今日の命題であり、将来のそれでもある

『希望』は、『明日が世界の終わりでも、私は今日りんごの木を植える』行為を起こすものであろう。『向上心のある虫（新渡戸稲造の学び）&俯瞰的ながん病理学者（吉田富三の学び）』からみる『現代の日本社会の病理』の視点は、『Origin of fire』（ひのおきお 添付）の如く『医療の隙間を埋める』試みとして全国に広がることが期待される。

(1) 「明晰な病理学的診断」

(2) 「冷静な外科的処置」

(3) 「知的な内科的診療」

(4) 「人間力のある神経内科的ケア」

(5) 「人間の身体に起こることは、人間社会でも起こる＝がん哲学」

1860年代遣米使節団（[勝海舟：1823-1899]らがいた）が、ニューヨークのブロードウェイを行進した。彼らの行進を見物した詩人ホイットマン（Walter Whitman, 1819-1892）は、印象を『考え深げな黙想と真摯な魂と輝く目』と表現している。この風貌こそ、現代に求められる『学者の風貌』でなかろうか。

- (1) 賢明な寛容さ (the wise patience)
- (2) 行動より大切な静思 (contemplation beyond action)
- (3) 紛争や勝利より大切な理念 (vision beyond conflict and success)
- (4) 実例と実行 (example and own action)

### お わ り に

私は、2007年から、新渡戸稲造『武士道』と内村鑑三『代表的日本人』の読書会を毎月行っている。『継続は力なり』を実感する日々である。まさに、【役割意識と使命感～『新しい自分の発見&他人の理解が深まる』～】である。これこそ、『自分の力が 人に役に立つと思うときは進んでやれ』（新渡戸稲造）の時代的タイミング

グであろう。『教育とは、すべてのものを忘れた後に残るものをいう』（南原繁）。『最も剛毅なる者は最も柔和なる者であり、愛ある者は勇敢なる者である』とは、『高き自由の精神』を持って医療に従事する者への普遍的な真理であろう。『他人の苦痛に対する思いやりは、医学、医療の根本』である。

### 「医療者の2つの使命～」

- (1) 『学問的、科学的な責任』で、病気を診断・治療する→学者的な面
- (2) 『人間的な責任』で、手をさしのべる→患者と温かい人間としての関係

開示すべき潜在的利益相反状態はない。

## 著者プロフィール



樋野 興夫 Okio Hino

所属・職：学校法人恵泉女学園・理事長  
新渡戸稲造記念センター長  
順天堂大学名誉教授  
がん哲学外来市民学会代表

略歴：1954年、島根県生まれ、医学博士  
米国アインシュタイン医科大学肝臓研究センター、Fox Chase Cancer Center、がん研究所実験病理部長などを経て2003年から順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授に就任。2008年、がん患者と医療現場との『隙間』を埋めるべく『がん哲学外来』を開設。  
日本病理学賞／高松宮妃癌研究基金学術賞／新渡戸・南原賞／東京都医師会グループ研究賞／保健文化賞／日本対がん協会「朝日がん大賞」／日本癌学会「長與又郎賞」などを受賞。主な著書に『がん哲学』、『明日この世を去るとしても、今日の花に水をあげなさい』、『がん細胞から学んだ生き方』、『なぜ、こんな目にあわなければならないのか』、『新渡戸稲造 壁を破る言葉』など多数。

所属学会：日本癌学会（理事歴任）、日本病理学会（理事歴任）、第99回日本病理学会総会会長、日本遺伝性腫瘍学会 名誉理事長、日本 Medical Village 学会理事長、日本地域医療連携システム学会理事長 等